

阿波国府跡第8次調査概報

— 1 9 8 9 年 度 —

1 9 9 0

徳島市教育委員会



阿波国府跡第8次調査概報

— 1 9 8 9 年 度 —

1990

徳島市教育委員会

序

阿波国府は、奈良時代の中央集権化の中で、地方行政官庁として造営されたものです。

阿波国府は、徳島市国府町府中の大御和神社を中心に展開したといわれますが、長い歴史の経過の中で幾多の変遷を繰り返し、威容を誇ったと思われる奈良・平安時代の府域や政庁の建物は地下深く眠ってしまったようです。

昭和57年度より国庫補助を受けて、県下でも最大級の重要遺跡である阿波国府跡の府域及び政庁の規模・構造などの確認調査を実施しております。

本遺跡の調査によって、該期の歴史的環境の復元あるいは文化と技術の伝播状態を把握する上において貴重な資料が提供されるものと思われます。

最後に、調査にあたりまして、御指導・御助言をいただきました研究者の方々をはじめ、地元及び地権者の方々の真摯な御助力に対して深く感謝いたします。

平成2年3月31日

徳島市教育委員長

教育長 久木吉春

例　　言

- 1 本書は、平成元年度に国庫補助を受けて実施した阿波国府跡の重要遺跡確認調査（第8次調査）の概要報告書である。
- 2 発掘調査は、徳島市教育委員会が主体となり、平成2年1月16日から同年3月27日まで実施した。また、事務処理については徳島市教育委員会社会教育課が担当した。
- 3 調査は、三宅良明（社会教育課主事）が担当し、調査員として高木　淳、倉佐晃次、中野勝美、市川欣也が携わった。
- 4 発掘調査地点は徳島市国府町観音寺461, 464および国府町日開50-1, 51-1である。
- 5 本書に収録した遺構実測は、調査員・調査補助員が分担した。また、遺構図トレース・遺物実測およびトレース・写真撮影は三宅が担当した。
- 6 第2図、第6図の地図は、徳島市発行の「徳島市全図」1:1,000地形図を転載し、若干補正した。
- 7 土色の判定は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』1967によった。
- 8 調査にあたって、岡内三眞氏、島巡賢二氏より御教示をうけた。また、土地所有者の小林謙二氏、島　一夫氏をはじめ、多くの方々の御援助を賜った。
- 9 本書は、三宅が編集・執筆した。

本文目次

I はじめに.....	1
II 神明地区の調査成果の概要.....	1
1 おもな検出遺構.....	1
2 おもな出土遺物.....	3
III 日開南地区の調査成果の概要.....	7
1 おもな検出遺構.....	7
2 おもな出土遺物.....	7
IV 小結.....	10

挿 図 目 次

第1図 阿波国府跡発掘調査地点周辺地形図	2
第2図 神明地区調査地点	3
第3図 神明地区SK-04出土土器実測図	3
第4図 神明地区出土土器実測図	4
第5図 神明地区検出遺構配置図	5
第6図 日開南地区調査地点	7
第7図 日開南地区（第1調査区）検出遺構	8
第8図 日開南地区出土土器実測図	9

図 版 目 次

図版1 神明地区 I区遺構検出状況 (東から)	
神明地区 II区遺構検出状況 (東から)	
図版2 神明地区 SK-04 検出状況 (南東から)	
日開南地区 第1調査区 (南から)	
図版3 日開南地区 第1調査区第1遺構面検出状況 (北西から)	
日開南地区 第1調査区第2遺構面検出状況 (東から)	
図版4 日開南地区 第2調査区遺構検出状況 (北から)	
日開南地区 第3調査区遺構検出状況 (西から)	

I はじめに

本年度の調査は、従来「後期国府跡」（条理地割方8町）として推定されている地域のほぼ中央部にあたる国府町観音寺神明で200m²（神明地区）、推定府域からは北へ外れた国府町日開南で400m²（日開南地区）を対象に実施した。

神明地区は、昭和62年度の第6次調査で掘立柱建物跡、溝、井戸などの遺構と、墨書き土器・籠書き土器・石器をはじめとする国府跡を想定させる多量の遺物が出土した地点（昭和62年度神明地区）の北西約200mの地点にあたり、これまでの調査結果からいっても、10~11世紀頃の阿波國府跡の中心部の一角を占めると思われ、関連遺構の検出が予想されたので今回調査地点の一つに選んだ。

日開南地区は、国府推定府域からいくぶん北へ外れるが、一部条里が残っていること、この近辺でこれまでに一度も調査を行っていないこと、また、以前こより約1km北東の地点で県教委が立ち合い調査を実施した際に、自然流路（旧河道）より奈良時代末の木製品・土師器などが出土していることなどもあり、初期政府に関連する遺構が検出される可能性も考えられ、この地域で調査を実施することにした。

II 神明地区の調査成果の概要

調査地の地目は、休耕地および畠地であり、現地表面で海拔約6.8mを測る。調査区は土地利用との関係もあり、I区とII区に分け、それぞれ149m²、51m²を発掘した。

1 おもな検出遺構

現地表面下30~50cmに存在する黄褐色シルト層を遺構面とする。

本調査区で検出された遺構は、溝・土壤・掘立柱建物跡（柱穴）などである。

溝SD-01 I区の南寄りで検出された東西方向に走る溝である。溝の南側掘形は調査区外に存在するため、幅は不明であるが、少なくとも4m以上を測る。深さは10~15cmと浅く、後世の開墾等によって上部の大部分が削平されたものと思われる。調査区西寄りでは、ほとんど痕跡をとどめない。埋土に土師器片を多量に含む。

不明遺構SX-08, 09, 10 SD-01 の底部において検出された。したがって溝に伴うものあるいはそれ以前の遺構であるといえる。いずれも幅約2m、深さ20~25cmを測り、南北方向に主軸をもち、等間隔に並んでいる。これらの遺構の北端がいずれもSD-01の掘形ラインとほぼかさなるかたちで立ち上がるため、SD-01と関連する遺構である可能性も高いが、現在のところ性格は不明である。土師器の杯等を包含する。

土壤SK-01 I区北西隅で検出されたやや規模の大きな土壤であると考えているが、浅く、包含層の可能性もある。土器の出土が目立つ。

土壤SK-04 一辺1.7m、深さ約40cmを測るほぼ正方形の土壤。SD-01によって一部上部が切られている。ほぼ完形の土師器杯、黒色土器碗などが出土している。完掘後、底部四隅に直径約10cmの柱穴状遺構が検出された。



1. 神明地区

2. 日開南地区

A. 初期国府推定府域（条里地割 方6町）

B. 後期国府推定府域（条里地割 方8町）

C. 後期国府推定府域（正方位地割 方8町）

第1図 阿波國府跡発掘調査地点周辺地形図

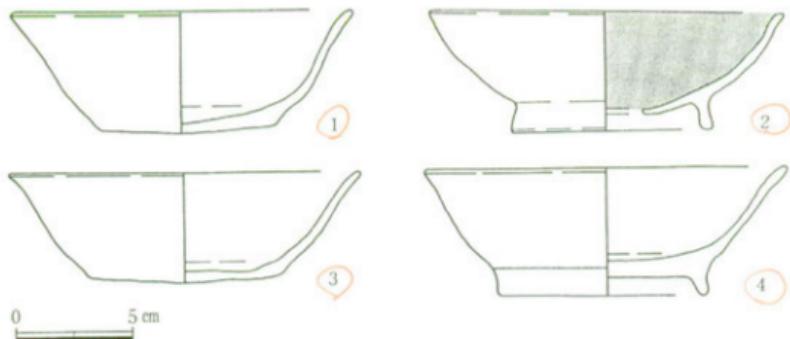


第2図 神明地区調査地点 (1 : 2,000)

掘立柱建物 現段階では、I区で4棟、II区で1棟の少なくとも5棟の掘立柱建物が復元されるものと思われる。

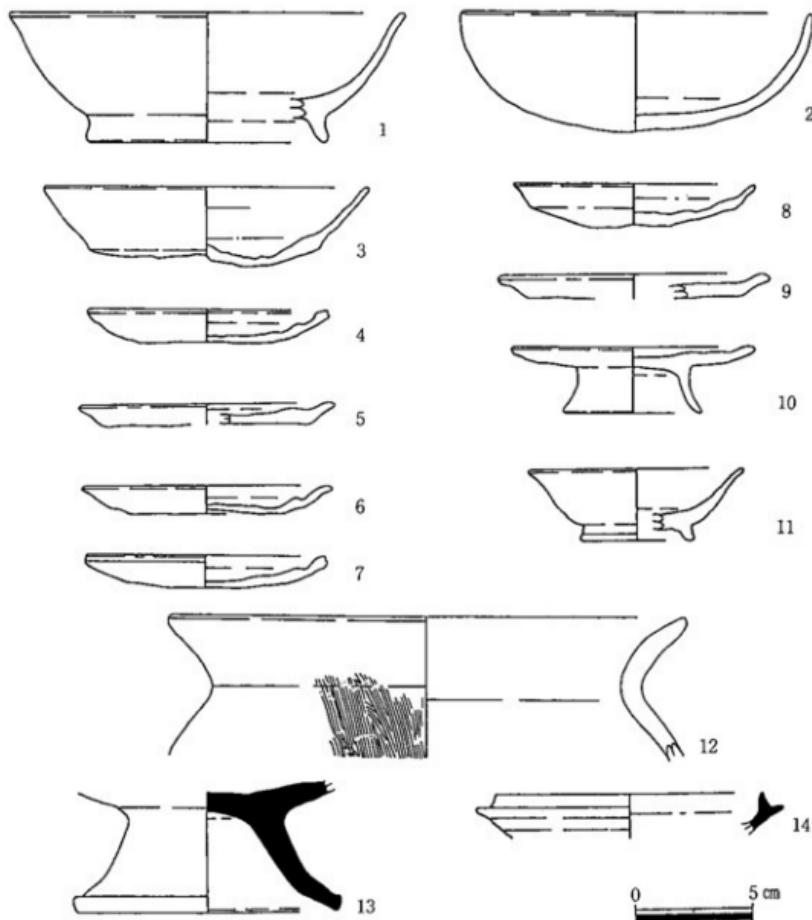
2 おもな出土遺物（第3図、第4図）

I・II区とも包含層中より多量の遺物が出土した。ただしほとんどが破片である。出土遺物は、土師器が圧倒的に多く、椀・壺・皿が主流を占め、ほかに甕が1点確認されている。第3図の1～4は、いずれもSK-04から出土したもので、いずれもほぼ原形を保っている。2は黒色土器

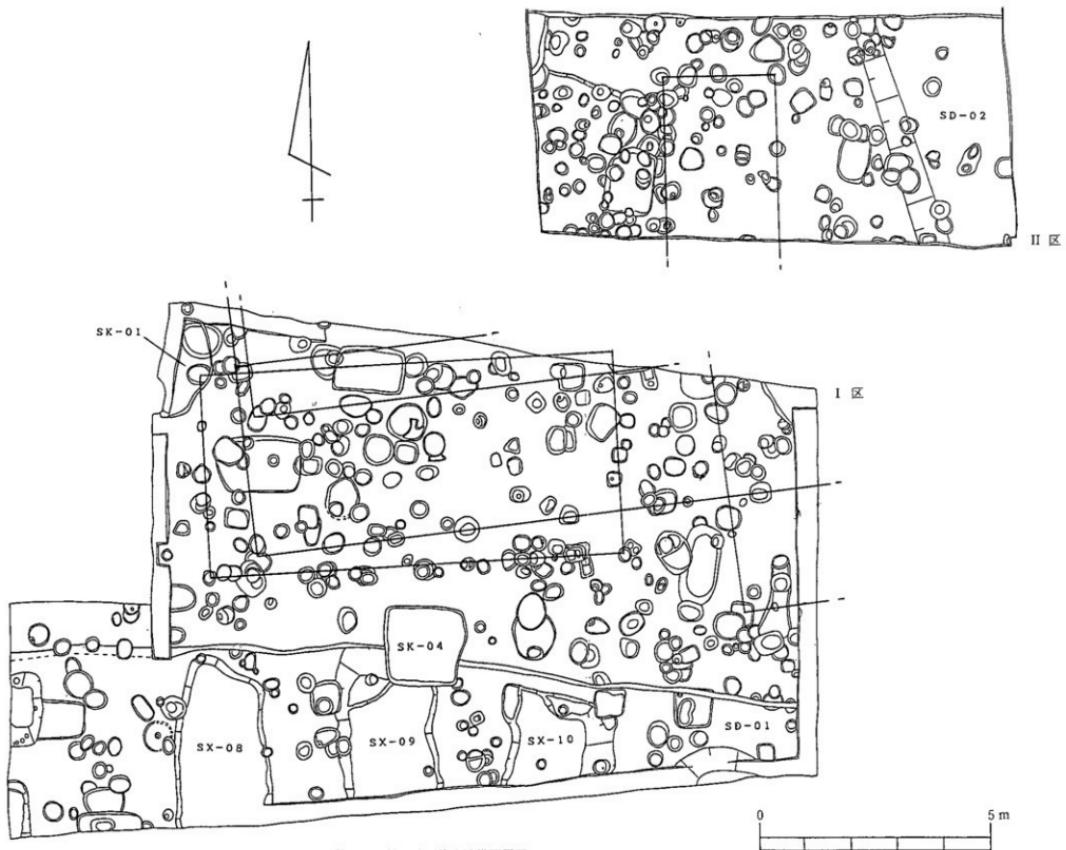


第3図 神明地区SK-04出土土器実測図

(内面) であり、底部には人為的と思われる径約3cmの円孔を穿っている。祭祀的に用いられた土器か。他に須恵器(壺・高壺・甕など)が少數と、綠釉・青磁も数点出土している。瓦は、平瓦の破片が2~3点ある。なお表土および直下の包含層からは、近世以降の陶磁器や寛永通寶などが出土している。



第4図 神明地区出土土器実測図



第5図 神明地区排出処置構配置図

III 日開南地区の調査成果の概要

地目は牧草地である。海拔約5.5mを測り、観音寺地域より1m以上低くなっている。調査対象面積は400m²で、土地管理者との協議において発掘方法が制約されたため、コの字状の調査区を設定し、便宜上西側を第1調査区、東側を第2調査区、北側を第3調査区とした（第6図）。



第6図 日開南地区調査地点（1：2,000）

1 おもな検出遺構

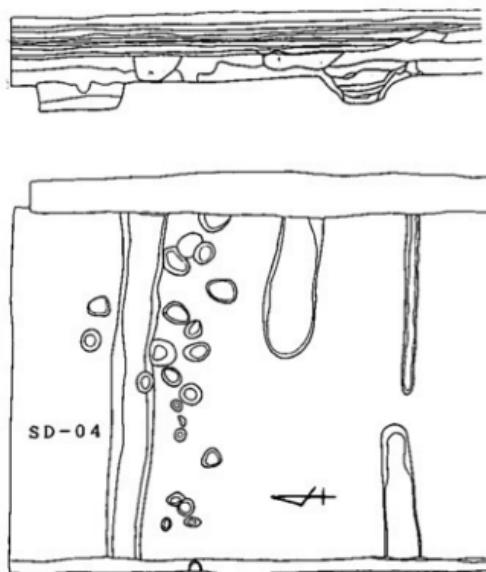
本調査区では、遺構面が2面存在することが確認された。ただし第2遺構面は弥生時代末～古墳時代初頭頃のものである。第1遺構面は表土下約25cmに存在し、第2遺構面は第1調査区のみで確認したが、表土下約90cmである。

第1調査区の第1遺構面では溝・ピットが検出された。溝SD-04は、調査区北端を東西に走り、幅60cm、深さ20cmを測る。この溝は第3調査区まで伸び、途中で消滅する。ピットは、3～4m四方で不明瞭ながら4基検出された。獨立柱建物が建つ可能性もあったので、調査区を東西に拡張したが他のピットの検出にはいたらなかった。

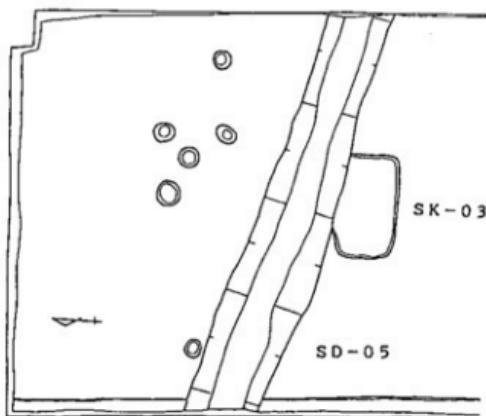
第2遺構面では、SD-05、SK-03があげられる。埋土中に包含する遺物は乏しいが、上層に存在する暗褐色包含層の出土遺物などからも、いずれも弥生時代末～古墳時代初頭頃の遺構である。溝は小規模なものである。

2 おもな出土遺物（第8図）

全体的に遺物の出土量は極めて乏しいといえる。1～6は、土師器の杯・皿・碗で、第1遺構面



第1遺構面

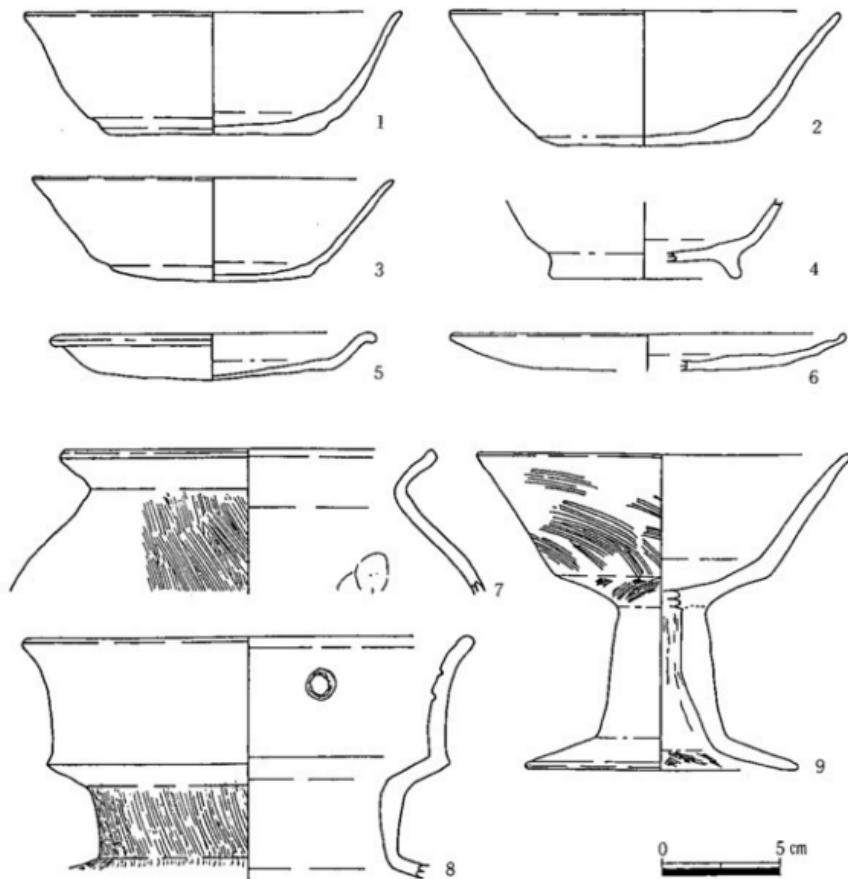


第2遺構面

0 2 cm

第7図 日開南地区（第1調査区）検出遺構

上の包含層より出土した。5の皿は底部に糸切り痕を残す。8は、二重口縁壺形土器で、SD-05の肩部（遺構外）で出土した。7の甕は包含層出土である。第3調査区においても同タイプの甕が包含層中から2個体分、比較的良好な遺存状態で出土している。第3調査区においても、当該期の遺構面は存在するものと思われる。



第8図 日開南地区出土土器実測図

IV 小 結

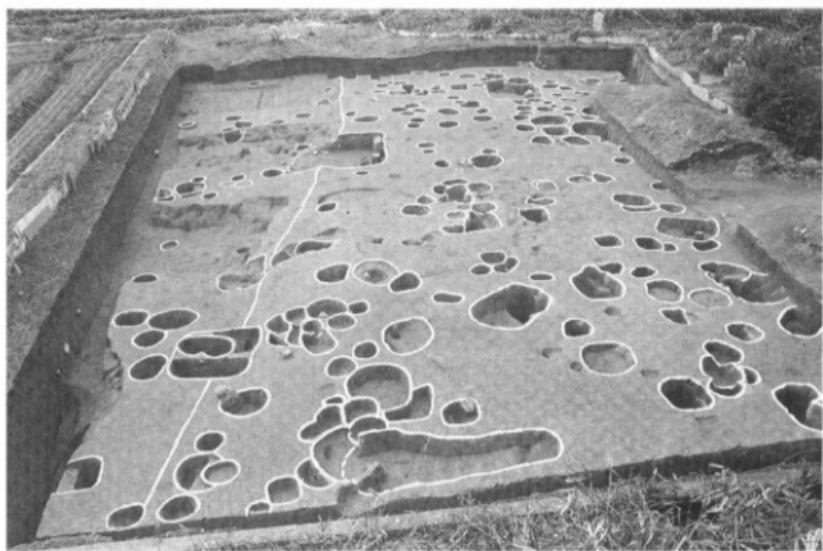
今回の重要遺跡確認調査では、初めて徳島本線より北側の地域、すなわち從来の阿波國府跡推定府域外の調査を試みた。調査を実施するに至った経緯は前述のとおりであるが、結果は明らかに阿波國府跡に関連すると思われる遺構の検出には至らなかった。

ただ、量的には極めて乏しいが、第6次調査をはじめとする観音寺地域周辺部の調査において出土する土師器と同形態の土器（第8図 1～6）およびそれらを伴う時期の若干の溝・ピットが検出された。このことは、少なくとも10～11世紀頃に府中・観音寺を中心に展開したと思われる阿波國府の周辺地域の様相を、今後知るうえでのひとつのきっかけを与えたものといえる。今後開発行為に伴う調査にも精力的に取り組む必要があろう。

なお、弥生時代末～古墳時代初頭頃の遺構が日開地域で確認されたのも初めてであり、鮎喰川西岸における当該期の遺跡の分布を考える上でも貴重な成果といえる。

神明地区の調査については、多数の柱穴が検出され、出土遺物をも考慮すると、第6次調査区で確認された阿波國府跡関連遺構の広がりの一端として捉えることができよう。これら観音寺地区の調査区は、方2町の政庁跡として推定している地域内にも入ってくるため、一段とその可能性が強くなったといえる。ただ、明瞭な建物配置や境界をなす溝や堀の跡が依然把握できており、来年度以降も当該地域の入念な調査を行う必要があり、政庁跡の早急な確認が望まれる。

図 版

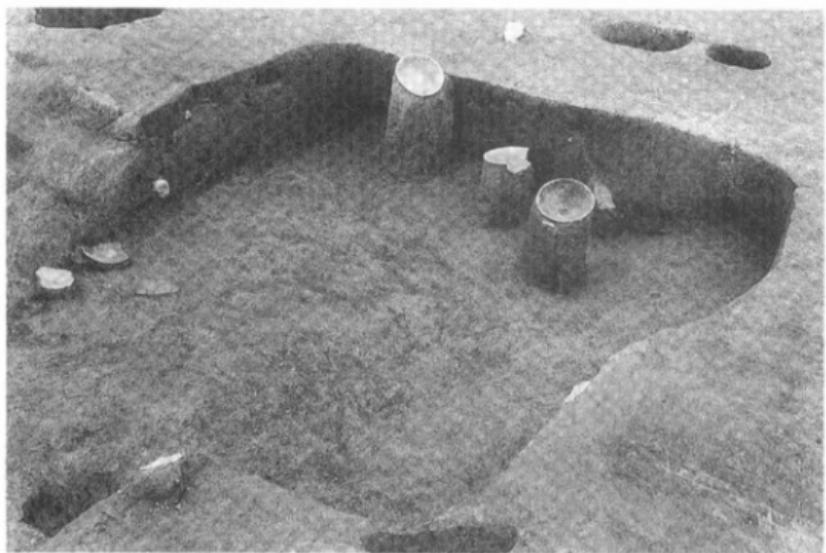


神明地区 I 区遺構検出状況 (東から)



神明地区 II 区遺構検出状況 (東から)

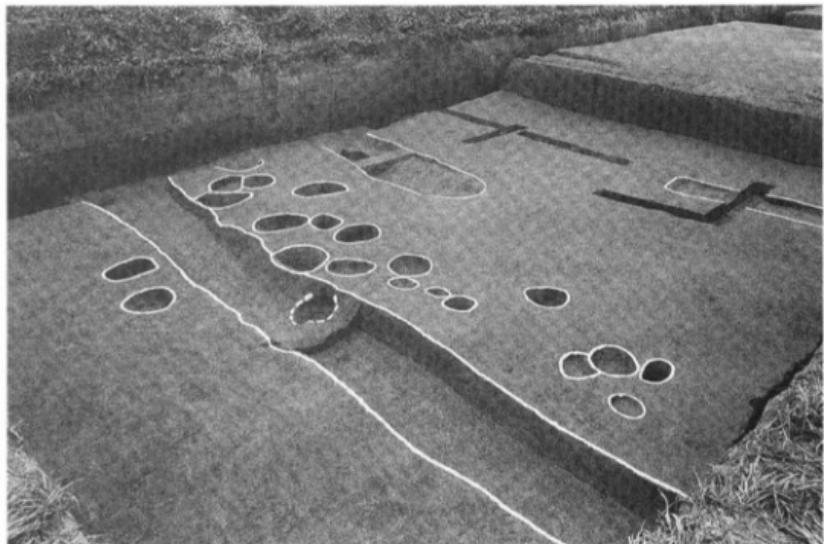
図版 2



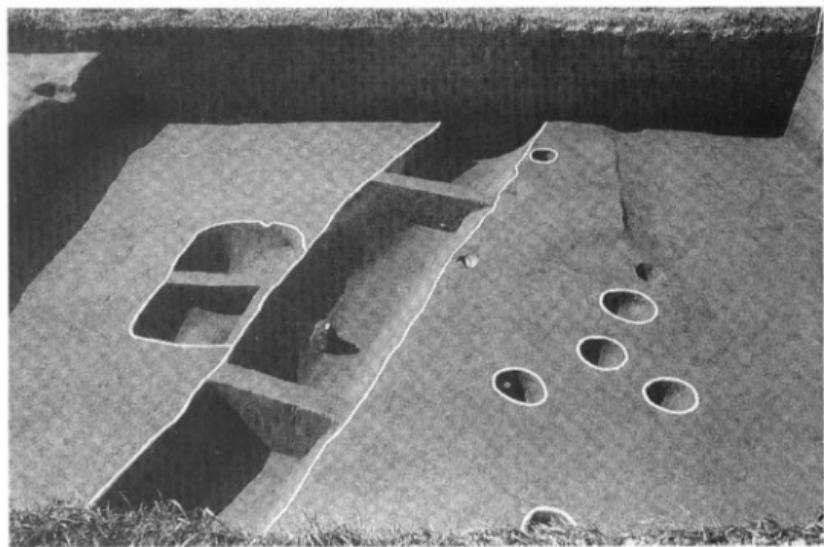
神明地区 SK-04検出状況 (南東から)



日開南地区 第1調査区 (南から)

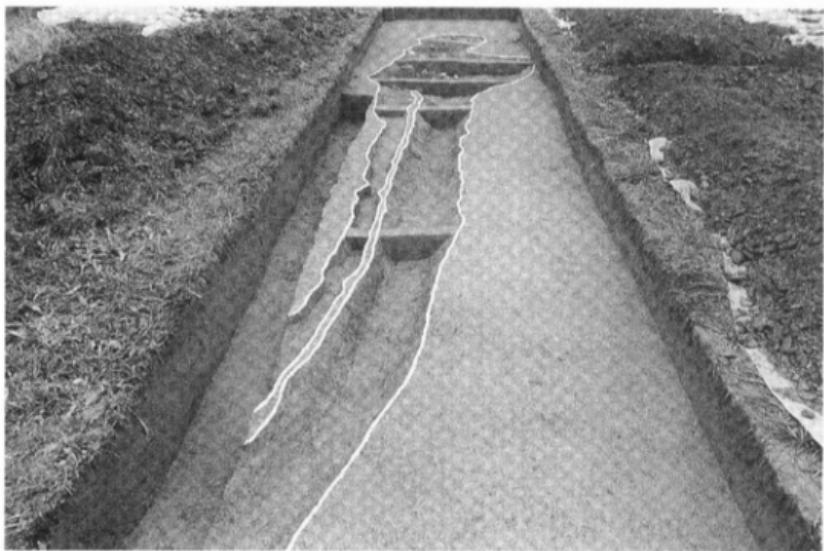


日開南地区 第1調査区第1遺構面検出状況 (北西から)

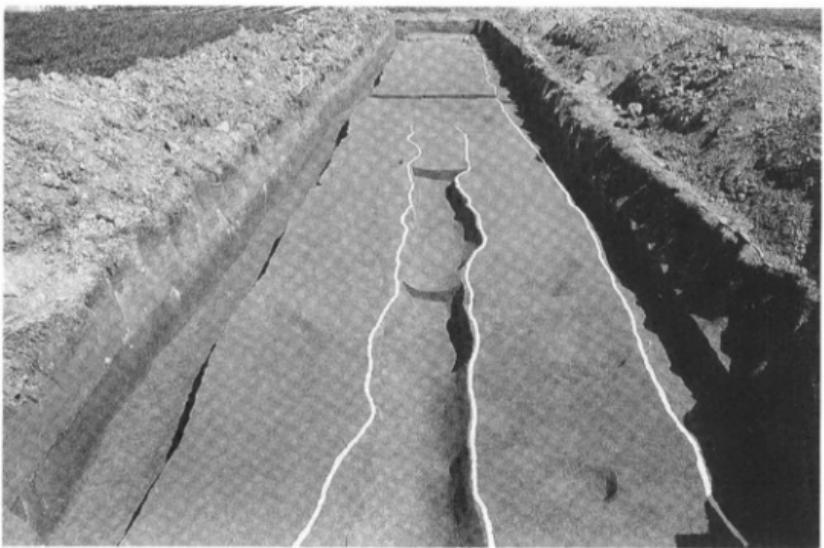


日開南地区 第1調査区第2遺構面検出状況 (東から)

図版 4



日開南地区 第2調査区遺構検出状況 (北から)



日開南地区 第3調査区遺構検出状況 (西から)

徳島市埋蔵文化財調査報告書第19集
阿波国府跡第8次調査概報
—1989年度—

平成2年3月31日
編集 徳島市教育委員会社会教育課
発行 徳島市教育委員会
印刷 グラント印刷